

# 「釣魚嶼」が描かれた「琉球図」とその系統 ——明代史料『廣輿図』を手がかりに（上）

(亜細亜大学) 青山 治世

## 〔要旨〕

明代後期の著名な地理書である『廣輿図』の増補改訂版に掲載されている「琉球図」に「釣魚嶼」が描かれていることはあまり知られていない。一方、同書では福建省などを描いた地図に「釣魚嶼」は一切描かれていない。この「琉球図」を描いたのは『籌海図編』の編者として知られる鄭若曾であり、鄭原作の「琉球図」「琉球國図」は、その後くり返し転載され日本にも伝わった。本稿は、「釣魚嶼」が描かれた「琉球図」「琉球國図」が作製された過程と、それがどのように伝播したのかを辿ることで、「釣魚嶼」が明朝の領域に含まれるとの認識は当時なかったこと、「釣魚嶼」が朝貢国である琉球に近接した島であると当時の明朝の人々が認識していたこと、それを示す現存する唯一の明代史料が『廣輿図』所載の「琉球図」であることを明らかにする。

## I. はじめに

- II. 『廣輿図』所載の「琉球図」と「釣魚嶼」
- III. 鄭若曾原作の「琉球國図」
- IV. 『廣輿考』所載の「琉球図」（以下、次号）
- V. 「釣魚嶼」が描かれた「琉球図」「琉球國図」の系統
- VI. おわりに

## I. はじめに

本稿では、明代の著名な地理書の一つである『廣輿図』に掲載されている「琉球図」に「釣魚嶼」が描かれている事実とその意義について考察する。「釣魚嶼」とは、現在の中国でいう釣魚島、台湾でいう釣魚台、日本でいう尖閣諸島の魚釣島のことである<sup>(1)</sup>。同島を中国領と主張する際に、地図も含めた明清時代の歴史文献が証拠として示されるが、地図の場合、中国沿海の島々を描いた地図に「釣魚嶼」が記載されていることをその根拠とすることが多い。本稿で検討するのは、琉球を

描いた地図の中に「釣魚嶼」が記載されていることについてであるが、もちろんその事実だけで、同島が琉球領であったと主張するものではない。ただ、どうしてこのような地図が存在するのか、そしてそれが1枚にとどまらず、幾度となく転載されていったのか、という点については、管見の限りこれまで検討されたことはない。

よって、本稿の内容は領有権の問題とも関わるものではあるが、国際法の議論は行わず、これまでの歴史研究の不備を補うことを目的として、明清時代のものを中心に、史料自体から読み取れること、複数の史料をつなぎ合わせることによって見えてくることを、歴史学的に論じていきたい。本稿では特に書誌学・文献学的な考察を重視し、数多く存在する「釣魚嶼」が描かれた「琉球図」「琉球國図」の系統についても明らかにしていく。

## II. 『廣輿図』所載の「琉球図」と「釣魚嶼」

結論を先にいえば、「釣魚嶼」が描かれた「琉球図」「琉球國図」として唯一現存する明代の文

献は、明代後期に編纂された『廣輿圖』所載の「琉球圖」のみであり、その歴史的意義は軽視できないということである。よって、まず『廣輿圖』とその歴史的意義については確認しておきたい。これについては、海野一隆による重厚な研究がすでにがあるので、その解説を引用させていただく。

明の羅洪先の手による地図帳で、中国の伝統的な地図製作法である方格図法によった現存の地図として西安の碑林に伝わる阜昌七年（一一三六）の「禹跡圖」に次いで古いものである。そしてその方格は、作者羅洪先がその自序に記すように、元の朱思本の図にならったものであった。（中略）

今日『廣輿圖』として流布しているのは、万曆七年（一五七九）刊本を清の嘉慶年間に模刻したものであるが、卷頭に寄せられている序文を見れば、それが嘉靖四十年（一五六一）および同四十五年（一五六六）にも刊行されており、しかもその度毎に増補改訂も行なわれたことがわかる。また嘉靖四十年の胡松の序によれば、それ以前に『廣輿圖』は完成していたこともわかる。（中略）

『廣輿圖』は度々版を重ねた。需要が多かったからであろう。そればかりか『廣輿圖』そのものをまねた出版も行なわれているし、その収載地図は実に多くの書籍に引用されている。『廣輿圖』系の地図は、明代後期以降永く中国の地図界に君臨した。中国だけでなく、この系統の地図は日本やヨーロッパにも伝わって、中国地図に一つの形式を与えることになった<sup>(2)</sup>。

『廣輿圖』が明代中国を代表し、後世にも影響を与えた地理書であったこと、同書が繰り返し増補改訂されて重版され続けたことがわかる。現在確認されている版本をまとめると表1のとおり

となる。

本稿が注目する「琉球圖」が『廣輿圖』に掲載されるのは、第三版の嘉靖40年（1561）胡松刻本以降である。羅洪先の『廣輿圖』初刻本にはなかった「日本圖」と「琉球圖」を増補したのが胡松であることは、胡松自身と徐九臯による序文に記されている<sup>(7)</sup>。ここでは、同じく「琉球圖」を掲載する第七版の万曆7年（1579）銭岱刻本（二巻、東洋文庫所蔵）をもとに、「釣魚嶼」の記載に関する問題の要点を確認しておきたい<sup>(8)</sup>。

同書では、「輿地總圖」（巻之一、1~2葉）、「福建輿圖」（巻之一、67~71葉）、「九辺總圖」（巻之二、4~5葉）、「華夷總圖」（巻之二、102~103葉）などには、いずれも「釣魚嶼」などの記載は見られない。これについては、すでに黎鶴藤が「明代において最も広く流布した省別地図集である『廣輿圖』では、福建の区域内にはまったく釣魚台が含まれていない。したがって、釣魚台が明朝において福建の一部として認識されていたから中国に属するのだというには、一方的な願望にもとづく推測に過ぎない」<sup>(9)</sup>と指摘しているとおりである。

一方、同書所載の「琉球圖」（巻之二、95~96葉、図1——図は本文の後にまとめて掲載）には、琉球（沖縄本島）の南西沿海に「釣魚嶼」の記載がある（「釣魚嶼」部分の拡大図は次号の図11に掲載）。後述する『廣輿考』（万曆23年（1595）序刊本）所載の「琉球圖」（次号掲載の図9）よりも沖縄本島に近接して（あるいは、ほぼ接岸しているように）描かれている。この「琉球圖」は見てのとおり、沖縄本島のなかに王宮や門、寺院などの建物が島一面に描かれ、また「小琉球」（台湾の古称）や「釣魚嶼」、その他の島嶼の位置も、およそ正確とは思えない。

これは「密集縮地」と呼ばれる当時の中国における地図画法の一つで、地理的な位置の正確さは度外視して、作製者が重要と考える都市、建物、山、島嶼などを画面に集中して描き出す図法であり、

表 1 『広輿図』版本一覧<sup>(3)</sup>

版次	刊年／版本	序文撰者／底本	主な増補事項	所蔵機関
初	嘉靖 36 年(1557) ＊成(2017)では嘉靖 34 年(1555)前後 初刻本	朱思本, 羅洪先		中国国家図書館 <sup>(4)</sup> , 遼寧省図書館(成(2017)では遼寧省博物館), 山西省図書館, 国立公文書館(写本) <sup>(5)</sup>
二	嘉靖 37 年(1558) 南京十三道監察御史重刊本	朱思本, 羅洪先 底本は初刻本	増補なし。＊117葉上部に「嘉靖戊午南京十三道監察御史重刊」と刻す, 他は初刻本と同じ(成(2017))	米国議会図書館, 中国第一歴史檔案館, 神戸市立博物館(南波コレクション)
三	嘉靖 40 年(1561) 胡松刻本	朱思本, 羅洪先 胡松, 徐九臯 底本は初刻本	琉球図・日本図・華夷総図・各省および九辺の諸図についての按語	河南省図書館, 浙江図書館
四	嘉靖 43 年(1564) 吳季源刻本	底本は初刻本か	増補なし。＊巻首に「嘉靖甲子春崇安后(後?)学止山丘雲霄偕序」。「輿地総図」の画方を 3/4 減らす。	浙江図書館
五	嘉靖 45 年(1566) 韓君恩刻本	第三版のほかに 霍冀, 韓君恩 底本は胡松年刻本	第三版のほかに, 桂萼「輿図記叙」16篇, 許論「九辺図論」9篇を増補。全書を2巻に分ける。	中国歴史博物館, 南京図書館, ハーヴィアード燕京図書館, ほか
六	隆慶 5 年(1572)	?	?	『四庫簡明目録注』による(海野(2010)による)
七	万暦 7 年(1579) 銭岱刻本	第五版のほかに 銭岱 底本は韓君恩刻本	第五版のほかに廣東および九辺諸鎮についての按語。 最後に「華夷総図」と「華夷建置」の表格を増補。	天理図書館(一部嘉慶版により補写), 尊經閣文庫, 大英博物館, 東洋文庫, 中国国家図書館, 上海図書館, 河南省図書館, ほか <sup>(6)</sup>
八	嘉慶 3 年(1798)	第七版のほかに 章学濂識語	同上(但し女直關係の地名・記事を削除)	京都大学人文科学研究所・同文学部地理学研究室ほか
九	嘉慶 4 年(1799) 章学濂刻本	同上(識語の文章異なる) 底本は銭岱刻本	同上	省略＊現在確認できる版本の多くはこの版本

「釣魚嶼」などの島々が描かれ、中国側が領有根拠として挙げる「万里海防図」（鄭若曾『鄭開陽雜著』卷一）、「沿海山沙図」（鄭若曾『籌海図編』卷一）、「福建沿海山沙図」（茅元儀『武備志』卷二「海防」）なども、「密集縮地」の図法で描かれている。

『広輿図』所載の「琉球図」は原田禹雄がすでに取り上げており、「恐らく、中国で最も早い琉球の地図といえよう」と指摘している<sup>10</sup>。ただ、上述の「密集縮地」の図法によって描かれている点はあまり考慮せず、「琉球に関する文献と伝聞だけで描いたため、まことに幻想的な地図になってしまっている」と述べるにとどまり、「釣魚嶼」の記載については言及がない<sup>11</sup>。ただ、同図に「釣魚嶼」が描かれていることは、同じく原田が著した『尖閣諸島』と題する本で指摘されており、付録として『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」所載の「琉球国図」を転載した上で、次のように注記している。

鄭若曾の『琉球図説』の「琉球国図」だけを出しておいた。これと全く同様の図は、鄭若曾の『広輿図』内の「琉球図」、王圻の『三才図会』にもある（中略）井上清が、自分に都合のよい記述や図を搔き集めて、騒がしく述べまくるのに対し、私は、井上清にとって、最も都合の悪い図をひとつかかげておきたい。「琉球国図」と明記した中に、小琉球の台湾も、尖閣諸島も、それにどこにあるのかわからない竜鼈嶼・高華嶼も、台湾海峡の澎湖諸島まで描きこまれている。この図を出して、「中國人が、明確に琉球国図の中に書いているのだから、台湾も澎湖諸島も琉球のものだ」と、私は言う気はない。しかし、それと同じことを、今もなお、そしらぬ顔で主張し、強弁している人がいることだけはたしかである<sup>12</sup>。

同図を取り上げていることは評価できるが、問題点も少なくない。まずもって「鄭若曾の『広輿図』内の『琉球図』」という書き方は、『広輿図』自体が鄭若曾の著作であるかのように誤解されかねない。別の専門書で「『広輿図』は、元の朱思本の原図を、明の羅洪先が改編したもので、その中の「琉球図」を、鄭若曾が担当している」<sup>13</sup>と記しているので、先の引用文の鄭若曾はおそらく「琉球図」に係るのだろう。このように管見の限り、原田は世界で唯一、明代の『広輿図』所載の「琉球図」に「釣魚嶼」が記載されていることを指摘した研究者ではあるが、残念ながら、鄭若曾が作製した「琉球図」の起源とその継承・系統関係、そしてそれが持つ歴史的な意義については、気が付いていないようである。

『広輿図』所載の「琉球図」には、左面に説明文が付されており、その右側には「崑山監生鄭子若曾考著」とある。これはこの文が、明代後期の海防書として著名な『籌海図編』（嘉靖41年（1562）刊）の著者でもある鄭若曾（1503～1570）<sup>14</sup>が記した文章であることを表している。『広輿図』所載の「琉球図」は「鄭若曾が担当している」<sup>15</sup>と原田が述べたのも、これを根拠にしているのだろう。前述のとおり、『広輿図』所載の「琉球図」は、第三版（1561年）の刊行者である胡松（浙江布政使）によって初めて増補されたものであり、羅洪先が初刻本を編集した際に鄭若曾に「担当」させたものではない。『広輿図』所載の「琉球図」に付されている説明文は、鄭若曾『琉球図説』に掲載されている「琉球考」（図2）とほぼ同文である。

于向東・成思佳によれば、『琉球図説』は『朝鮮図説』『安南図説』とともに林潤（応天巡撫）が嘉靖40年（1561）から隆慶3年（1569）の間に刊行したのが最初の刊本だが、散佚して現存していないという<sup>16</sup>。于・成はこれを「隆慶年間刻本」としており、隆慶3年に限りなく近い時期の刊行

と推測していることから、1561年の第三版『広輿図』所載の「琉球図」は、林潤によって刊行された『琉球図説』を利用したとは考えにくい。そうであれば、想定されるのは、胡松が第三版『広輿図』を増補刊行する際に、未刊行の『琉球図説』のうち「琉球国図」と「琉球考」の原稿を鄭若曾から直接または間接に入手して掲載したか、あるいは原田の言葉を借りれば、胡松が増補作業の過程で「琉球図」とその説明部分を鄭に「担当」させたかのいずれかであろう。

筆者はそのうち後者の可能性が高いと考えている。なぜなら、『広輿図』所載の「琉球図」の説明文では「據其男女五百人還」とあるところが、『琉球図説』の「琉球考」では「據其男女数百人還」となっているなど、文言が一部異なるほか、『広輿図』所載の「琉球図」の説明文では、文末に「厥期二年一行每船止許百人多不過百五十人」とあるが、『琉球図説』の「琉球考」にはその文言は見当たらず、こうした違いは、『広輿図』がたんに『琉球図説』の原稿を入手して掲載しただけでは起こりえないと考えるからである<sup>17)</sup>。

「崑山監生鄭子若曾考著」とある以上、おそらくこの異同は鄭若曾本人の手によって生じたものと思われる。さらに地図自体も、『広輿図』所載の「琉球図」(図1)と『琉球図説』所載の「琉球国図」(図3)では、建物と島の位置や形状、山や海などの模様に違いが見られ、そのまま引き写したようには見えない<sup>18)</sup>。この両者の地図の違いが、2系統の「琉球図／琉球国図」を生み出すことになったと考えているが、その系統の違いについては第V節(次号)で後述したい。ここでは、『広輿図』所載の「琉球図」とその説明文は、鄭若曾自身が『琉球図説』の未刊原稿を利用して作成したものである蓋然性が高いこと、そしてそこに「釣魚嶼」が記載されていることを確認しておきたい。

### III. 鄭若曾原作の「琉球国図」

鄭若曾の著作集である『鄭開陽雜著』は、その卷一「万里海防図」や卷八「海防一覽図」(「万里海防図」の初稿)に「釣魚嶼」「黃毛山」(黃尾嶼、久場島)、「赤嶼」(赤尾嶼、大正島)が記載されていることから、これらの島は明朝の海防区域(版図)にすでに入っていたとの主張に使われる史料である<sup>19)</sup>。ただ不思議なことに、中国でも日本でも同書が清の康熙中期(17世紀後半)に編纂・刊行されたものであることは言及されていながら、それが後世の二次史料であることにはほとんど注意が向けられていない。一部の研究書では、図4・図5のように、まるで明代後期(16世紀半ば)の一次史料のごとく扱われている<sup>20)</sup>。

『四庫全書総目提要』では、『鄭開陽雜著』は鄭若曾の5代後裔にあたる鄭起泓とその子・定遠が、家にばらばらに残っていた鄭若曾の著作(散著)を康熙30年(1691)に11巻本に合訂出版したものであると説明されている<sup>21)</sup>。しかし、于向東・成思佳は考証の結果、『総目提要』の説明は誤りであり、康熙40年(1701)以後に完成したものとする<sup>22)</sup>。この『鄭開陽雜著』(鄭起泓・定遠刻本)卷七「琉球図説」所載の「琉球国図」が図4である。『鄭開陽雜著』はその後、乾隆年間に編纂された『欽定四庫全書』(1782年完成、史部十一・地理類五「辺防之属」所収)にも収録され、この『鄭開陽雜著』(『四庫全書』本)卷七「琉球図説」所載の「琉球国図」が図5である。

既存の研究では、こうした書誌学的な経緯を無視して、「万里海防図」や「海防一覽図」、そしてここで注目する「琉球国図」は、すべて嘉靖40年(1561)に作製されたものとするのがほとんどである<sup>23)</sup>。インターネット上の記事などには、『鄭開陽雜著』自体を「1561年」の刊行物とするものすらある<sup>24)</sup>。これは卷八「海防一覽図」所載の「万里海防図」の第一幅の版心の左側に「嘉靖辛酉年、

浙江巡撫胡宗憲序、嵐山鄭若曾編摹」と記されているからであろう。嘉靖辛酉年とは嘉靖40年(1561)に当たる。

むろん先に筆者自身も『琉球図説』について、散佚した明代の林潤刻本と康熙37年刻本の内容をほぼ同一と推定した上で検討しているように、史料が限られる以上、書誌的な考証を行った上で、成立年代が異なることを前提にした議論はある程度可能であろう<sup>24</sup>。しかし、次節以降で見るとおり、鄭若曾の原作とされる「琉球国図」も模写されていく過程で、配置や形、模様などが変化していることから、書誌的な考証や作製時期の検討を無視して、『鄭開陽雜著』などの史料を領有に関わる「歴史的な証拠」とすることはできないであろう。

ここであらためて「釣魚嶼」の記載について検討してみたい。『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」所載の「琉球国図」に「釣魚嶼」が記載されていることは、前述の原田禹雄のほか、鞠徳源、鄭海麟、黎鶴藤もすでに指摘している<sup>25</sup>。また、班偉も『琉球図説』所載の「琉球国図」に「釣魚嶼」が掲載されていることを指摘した上で<sup>26</sup>、次のようにその意義を述べている。

鄭若曾『琉球図説』の「琉球国図」は、中台側にとって最も不利な史料となる。その構図として、琉球国の周辺に「釣魚嶼」が「小琉球」「彭家山」「鷄籠嶼」「花瓶嶼」「彭湖島」と並んで配列され、同書「山川」条では「彭湖島」「高華嶼」「龜嶼」<sup>マダラ</sup>といった澎湖列島の旧名が「古米山」(久米島)とともに記されている。この「琉球国図」は、『図書編』卷五十、『三才図会』地理十三卷(王圻、1609年)など明代類書にも収録されているが、中台側の理屈に従えば、鄭若曾・章潢・王圻ら明代の学者たちが皆、尖閣諸島のみならず台湾・澎湖列島まで琉球国の領土と見な

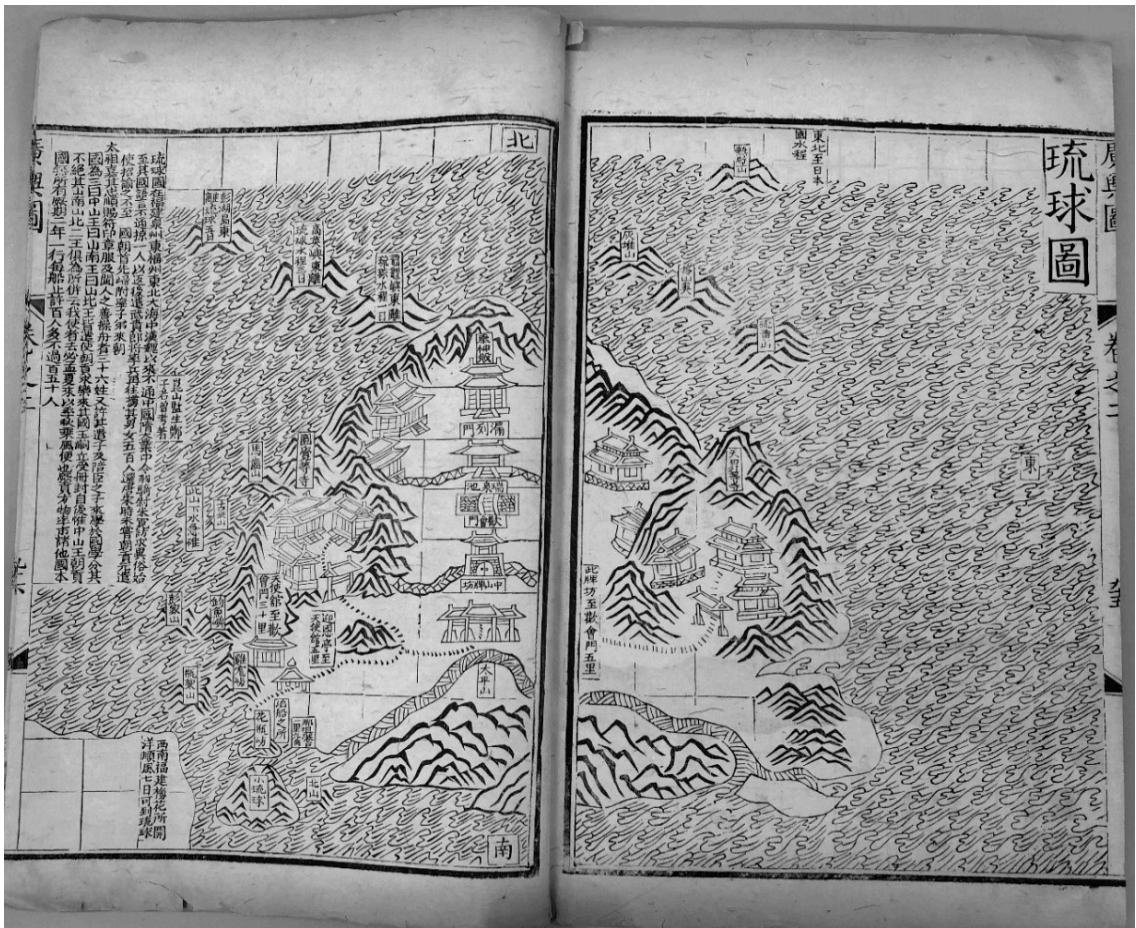
しているから、「琉球国図」に書き込んだという結論になろう。中台論客が決してこの史料に触れようとしないのは無理もない<sup>27</sup>。

「釣魚嶼」が描かれた「琉球国図」の存在について中国側があまり言及したがらないのは確かだが、上述のとおりまったく触れていないわけではない。ただその説明として、たとえば鄭海麟は、地図の描き方から見ても、釣魚嶼を含む「小琉球(台湾)」の附属島嶼は「古米山」や那覇港より左側に描かれており、鄭若曾の「琉球国図」はそれらの附属島嶼も含め、「小琉球(台湾)と大琉球(沖縄)と一緒に描いて、中国の海防区域の版図に組み入れた」ものであり、その目的は「防倭抗倭」つまり倭寇対策にあったと断言している<sup>28</sup>。

だが、鄭若曾から数えて5・6代あとの子孫によって編纂された『鄭開陽雜著』は、卷一・二「万里海防図論」、卷三「江防図考」、卷四「日本図纂」、卷五「朝鮮図説」、卷六「安南図説」、卷七「琉球図説」、卷八「海防一覧図」、卷九「海運図説」、卷十「黄河図議」、卷十一「蘇鉛浮糧議」から構成されており、海防が重視されていたことは確かだが、「琉球図説」自体には倭寇や海防に関わる記述は見られず、むしろ明朝の朝貢国であることに重点が置かれた著作となっている。それは「琉球国図」の左下隅に「西南福建梅花所開洋、順風七日可到琉球」(西南方面は福建の梅花所から出航して順風であれば7日で琉球に到着する)と書かれていることや、「琉球図説」の中には福建から琉球への冊封使節の航路を詳細に記した「福建使往大琉球鐵路」が掲載されるなど、琉球との朝貢・冊封関係が重視されていたことからもわかる<sup>29</sup>。

そもそも日本については「図纂」と題し、倭寇に関する内容が多いが、朝鮮・安南(ベトナム)・琉球は「図説」としており、いずれも明朝と朝貢・冊封関係にある国であることが重視された内容に

図1 『廣輿圖』(万暦7年(1579)銭岱刻本)所載の「琉球図」



なっていて、倭寇や海防に關わる記述は皆無である。つまり、「琉球図説」所載の「琉球国図」は、鄭海麟らがいうような「中国の海防区域」や「小琉球（台湾）」の附屬島嶼を含めた「中国の版図」を示そうとしたものではなく、朝貢・冊封を重視する中で、琉球という朝貢国の存在や、その琉球への冊封に際しての航路が記された文献であることは明白である。『籌海図編』に「琉球国図」が載っていないのもそのためであろう。

よって、「琉球国図」に「釣魚嶼」が描かれていても、それが「中国の海防区域」内や「中国の版図」内であることの証拠にはまったくならない。

むしろ「琉球図説」所載の「琉球国図」は、「釣魚嶼」が朝貢国たる琉球に近接した島であると、当時の明朝の人々が認識していたことを表す史料であり、それが明代後期の著名な地理書である『廣輿圖』(胡松による増補以降)、百科叢書である『三才図会』(王圻編、1609年刊、「琉球国図」は図6)や『図書編』(章潢編、1613年刊、「琉球国図」は図7)<sup>③1</sup>などに転載されていたことも、そうした認識が鄭若曾個人の著作にとどまらず、明代後期の知識人に広く行き渡っていたことを示しているといえよう。

(以下、次号につづく)

図2 鄭若曾『琉球図説』(康熙37年(1698)刊)  
所載の「琉球考」(早稲田大学図書館所  
蔵) (32)

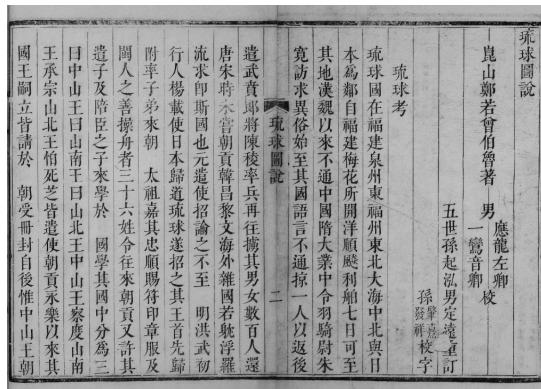


図3 鄭若曾『琉球図説』(康熙37年(1698)刊)  
所載の「琉球国図」(早稲田大学図書館所  
蔵)

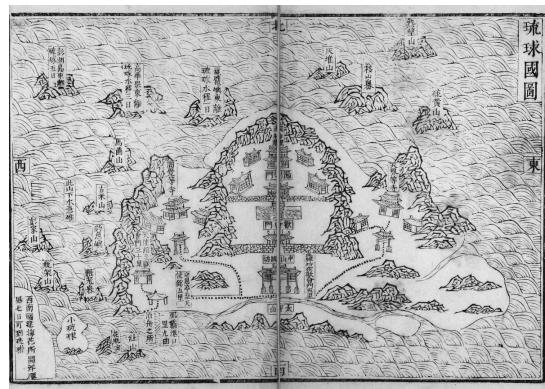


図4 鄭(2012)に掲載された『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」所載の「琉球国図」<sup>(33)</sup>

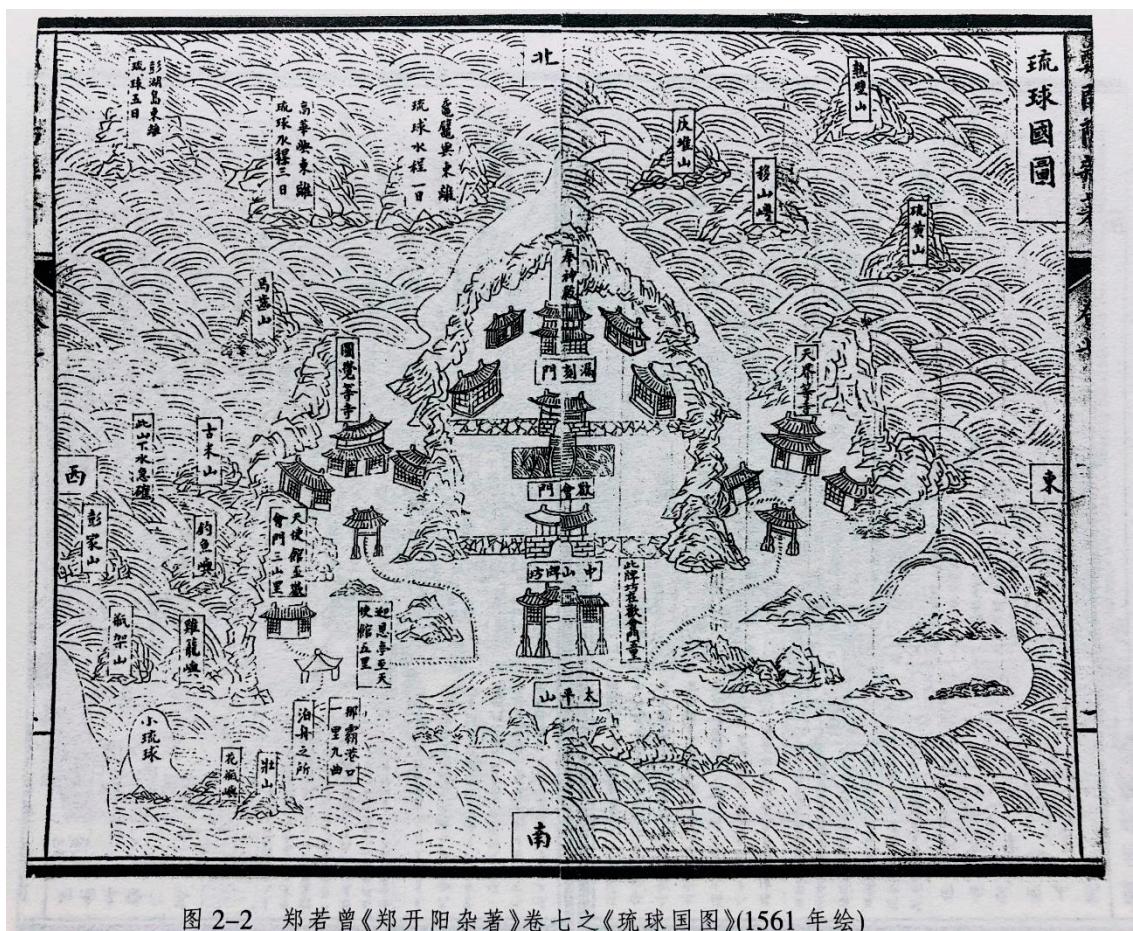


图 2-2 郑若曾《郑开阳杂著》卷七之《琉球国图》(1561 年绘)

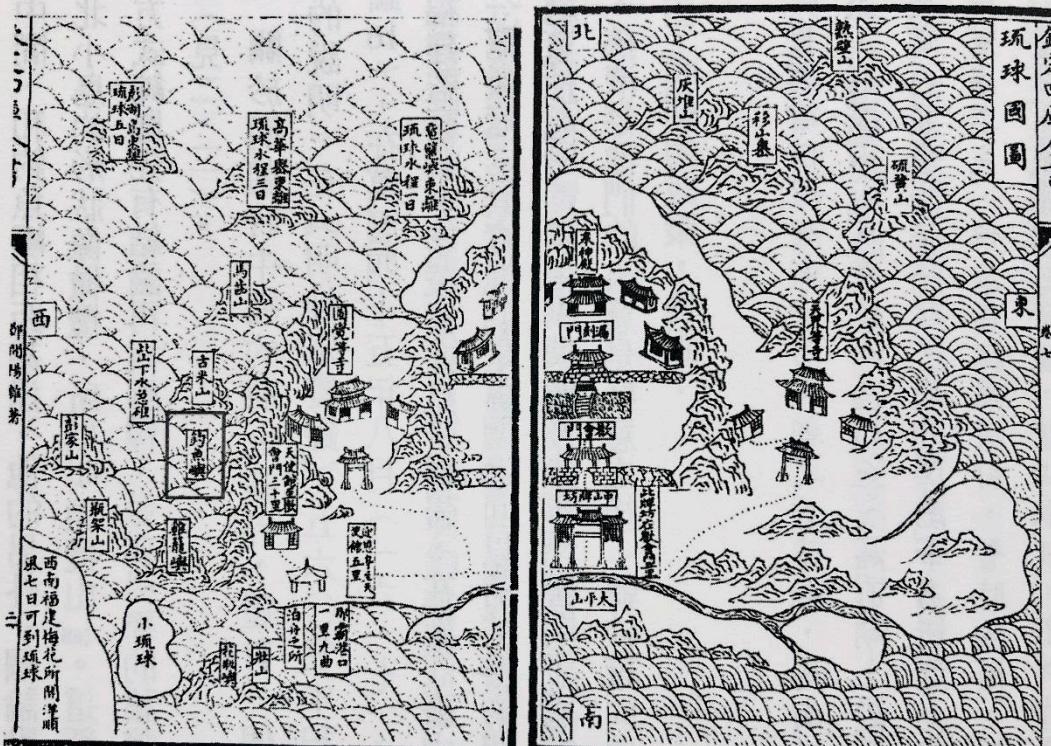
図 5 黎 (2014) に掲載された『鄭開陽雜著』(『四庫全書』本) 卷七「琉球國圖說」所載の「琉球國圖」<sup>34</sup>

圖 15：1570 年鄭若曾《鄭開陽雜著》之《琉球國圖》

鄭若曾把釣魚臺列嶼也畫在了琉球的地圖上（方框內）。複製自《文淵閣四庫全書》第五八四冊。

図 6 王圻『三才図会』(万曆37年 (1609) 序刊)  
所載の「琉球國圖」<sup>35</sup>図 7 章潢『図書編』(万曆41年 (1613) 刊)  
所載の「琉球國圖」<sup>36</sup>

## [注]

- (1)明代・清代の文献では、「釣魚嶼」がもっとも多く使用される名称であり、「黃尾嶼」(現在の日本名は久場島),「赤尾嶼」(現在の日本名は大正島)と同様に、島名に「嶼」が付いている。島名に「嶼」を付けることについては、福建省沿海の島名に多いことから、それ自体が「中国側によって最初に発見され命名されたことを表して」いるとの主張が見られるが(呉(2013) p.32ほか),もちろんそれへの反論もある(いしゐ(2014) pp.129~130)。
- (2)海野(2010) pp.20~22。
- (3)海野(2010) pp.379~380, 成(2017) pp.129~130を参考に作成。
- (4)『続修四庫全書』史部地理類第586冊(上海古籍出版社, 2008年)にも影印収録されている。
- (5)内閣文庫・紅葉山文庫旧蔵の清代写本(清代写本とすることは内閣文庫(1971) p.136による)。成(2017)は嘉靖40年(1561)胡松刻本の手抄本とするとが(p.129),琉球図・日本図ではなく(朝鮮図・安南図はある),また巻頭に胡松の序もないことから,初版か第二版の写本と思われる。
- (6)ただし,中国国家図書館,上海図書館のOPAC(オンライン蔵書目録)ではヒットしなかった(2020年2月17日現在)。
- (7)海野(2010) p.39。
- (8)本来であれば,初めて増補された第三版(嘉靖40年(1561)胡松刻本)所載の「琉球図」を確認する必要があるが,昨今における諸般の事情により中国の所蔵機関に出向いて調査することができず,いまだ閲覧できていない。そのため,ここではひとまず,第三版にも万曆7年(1579)錢岱刻本所載の「琉球図」(図1)と類似の内容を備えた地図が掲載されているとの推測に基づいて議論を進め,第三版の確認は今後の機会を俟ちたい。
- (9)黎(2014) p.24。

- (10)原田(2004) p.4, pp.236~239。後述する『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」所載の同様の「琉球国図」(図5と同じ)については,「『隋書』流求国以来の,琉球の記述や,冊封使録の記述を,やたらに盛り込んだ,世にも不思議な空想図となっている。しかし,この図が,その後の中国人に,そのまま引き継がれた」(原田(2004) p.4)と述べている。
- (11)原田(2004) p.239。
- (12)原田(2006) p.118。ただ不思議なことに,同書では『廣輿圖』所載の「琉球図」については,ここに引用したことしか書いていないにもかかわらず,その表紙には紙面にいっぱいに同図が彩色を施して掲載されている(表紙絵の説明もどこにも記されていない)。井上の所論については井上(1996)を参照。
- (13)原田(2004) p.4。
- (14)鄭若曾は,字は伯魯,号は開陽,江蘇省崑山の人,明の嘉靖年間に貢生となったが,任官していない。監生は,明清時代において国子監(国立大学に相当)の学生,または学生の身分を得た人を指す。
- (15)原田(2004) p.4。
- (16)『朝鮮図説・琉球図説・安南図説』(康熙37年(1698)刻本,中国国家図書館所蔵)の「朝鮮図説序」は,内容から見て林潤が朝鮮・安南・琉球の三つの図説のために記した総序にあたり,隆慶3年春に書かれたものであることから,それ以前の刊行と推定している(于・成(2016) p.97)。
- (17)前述のとおり明代に刊行されたという『琉球図説』(林潤刻本)は散佚して確認できないため,ここでは,この林潤刻本を重刻した『朝鮮図説・琉球図説・安南図説』(康熙37年(1698)刻本)の残本と思われる『琉球図説』(早稲田大学図書館所蔵本)が,明代の林潤刻本とほぼ同内容と推定した上で検討を進めたい。早稲田大学図

書館所蔵の『琉球図説』を、『朝鮮図説・琉球図説・安南図説』（康熙37年（1698）刻本）の残本とみる推定は、于・成（2016）による（p.98）。なお、『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」（康熙年間刻本と『四庫全書』所収本）の該当部分の文言も同じである。一方、成一農は、『廣輿図』初刻本に掲載されている「朝鮮図」と「安南図」は鄭若曾が作製した地図を模写したものとし、「日本図」と「琉球図」の「二幅の図と図説は鄭若曾がのちに作製したもので、羅洪先が『廣輿図』を作製した時にはまだ完成していなかったために、羅洪先によっては収録されず、嘉靖四十年になって胡松によってようやく補充された」と推測している（成（2017）p.50, 52）。「琉球考（琉球図考）」をはじめとする『琉球図説』所収の文章については、原田（2004）に丁寧な訳注が収録されている（pp.205～235）。

(18)この作図上の違いが、鄭本人によるものか、鄭の原稿を引き写す際に『廣輿図』の増補に携わった作図者によるものかはわからない。

(19)鞠（2006）pp.114～122、鄭（2012）pp.51～52, 170、呉（2013）pp.115～117、国家図書館中国辺疆文献研究中心（2015）p.64、ほか。また、鄭若曾が編纂した『籌海図編』卷一「沿海山沙図」所載の「福七」「福八」の地図に「釣魚嶼」「黃毛山」「赤嶼」が記載されていることも、中国の領有根拠としてよく取り上げられる（呉（2013）pp.111～114ほか）。鄭若曾の「万里海防図」を含む明清代の海防図については、成（2020）も参照。

(20)図4のうち、「図2-2」と記すタイトルとキャプションは鄭（2012）による。「1561年絵」とあるが、この版本自体は140年後の清代前期のものである。図5のうち、「図15」と記すタイトルとキャプションは黎（2014）による。「1570年」と記す根拠は不明（1570年は鄭若曾が死去した年である）。なお、『鄭開陽雜著』卷七「琉

球図説」は、黃潤華・薛英編『国家図書館藏琉球資料匯編』（北京図書出版社、2000年）上巻に「康熙37年刊本」が影印収録され、『叢書集成續編』第245冊（台北：新文豐出版公司、1989年）にも影印収録（底本未詳）されている。

(21)宋（2017）はこの説明を踏襲し、刊行された『鄭開陽雜著』は康熙30年刻本と民国21年陶風樓石印本のみとする（p.128）。静嘉堂文庫は宋が言及していない康熙36年刊とする版本（4冊、十万巻樓旧蔵本）を所蔵する。十万巻樓は清末の蔵書家・陸心源の蔵書楼で、静嘉堂文庫は1907年にその収蔵本を購入している。

(22)于・成（2016）p.99。

(23)鞠（2006）p.116、鄭（2012）pp.169～170。

(24)「新発見的史料佐証——“高華嶼”是釣魚島的旧称」2018年12月28日、中国歴史内参、网易ウェブサイト <http://dy.163.com/v2/article/detail/E44ARQAR0514BRNC.html> (2020年5月1日閲覧)。

(25)孫靖国は、書誌学・文献学的な考察に基づいて、「鄭若曾の著作が流伝・刊刻されていく過程で、地図の風格は基本的に比較的な安定を保持している」と述べている（孫（2019）p.186）。

(26)鞠（2006）pp.136～137（卷七を卷十と誤記）、鄭（2012）pp.48～49、p.169、黎（2014）p.24、pp.34～35。ただし黎蝸藤は、康熙年間中期に刊行された『鄭開陽雜著』卷七「琉球図説」からではなく、乾隆年間に編纂された『欽定四庫全書』所収の『鄭開陽雜著』（『文淵閣四庫全書』台湾商務印書館、1983年影印版、第584冊）を典拠としている（35頁に掲載されている図版も『欽定四庫全書』のもの。図5をみよ）。なお、この図の「高華嶼」が実際の「釣魚嶼」で、「龍鼈嶼」が「古米山」（久米島）であるとする鞠徳源の所論に対して、鄭海麟が批判を加えており（鄭（2013）pp.273～275）、その点は妥当と思われる。ただ鄭は、秋岡武次郎『日本地図史』（河出書房、1955年、p.26）所載の「琉球國之図」

が江戸期の『和漢三才図会』（おそらく正徳2年（1712）初版本）所載の同図を転載したものであることは理解していないようである。

27班（2012）p.48、班（2019）p.42。班が参照しているのは『日本史史料彙編』第六冊（全国図書館文献縮微複製中心、2004年）所収の『琉球図説』である。浦野起央も「16世紀、鄭若曾の『琉球図説』の『琉球国図』に釣魚島がある」（浦野（2014）p.53）と指摘している。

28班（2019）p.42。

29鄭（2012）pp.48～49。

30鄭若曾の『琉球国図』が、嘉靖13年（1534）に琉球に派遣された冊封使の陳侃が著した『使琉球錄』の地理的な記述を参考に作製されたことはすでに指摘されているとおりである（孫（2016）p.61ほか）。

31章潢（1527～1608）が嘉靖41年（1562）に編纂を開始、万暦5年（1577）に一旦完成し、最初の書名は『論世編』とした。その後、章は晩年まで修訂増補を繰り返し、章の没後、万暦41年（1613）に弟子の万尚烈らが出版した（万暦41年新建万尚烈刻本）。その後、天啓3年（1623）に岳元声による修版印本が刊行されるが、本文は万暦41年刻本とまったく同じである。『欽定四庫全書』所収本もある。以上、潘（2017）pp.17～21を参照。

32早稲田大学図書館ホームページ（[https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04\\_04709/index.html](https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04_04709/index.html)、2020年5月1日閲覧）。康熙37年（1698）の刊行としたのは、于・成（2016）による。図3も同じ。

33鄭（2012）p.169より転載。

34黎（2014）p.35より転載。出典は『文淵閣四庫全書』（台北：台湾商務印書館、1983年影印版）第584冊。

35国立国会図書館所蔵。同館デジタルコレクションより（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2574370?tocOpened=1>、2020年5月1日閲覧）。

36（2020年5月1日閲覧）。

36国立国会図書館所蔵。同館デジタルコレクションより（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2596467?tocOpened=1>、2020年5月1日閲覧）。

## 【参考文献】

- いしみのぞむ（2014）『尖閣反駁マニュアル百題』福岡：集広舎。
- 井上清（1996）『「尖閣」列島——釣魚諸島の史的解明』東京：第三書館。
- 于向東・成思佳（2016）「鄭若曾与「安南図説」略論」、『中国辺疆史地研究』2016年第3期。
- 浦野起央（2014）『地図と年表で見る日本の領土問題』東京：三和書籍。
- 海野一隆（2010）『地図文化史上の広輿図』東京：財団法人東洋文庫。
- 鞠徳源（2006）『釣魚島正名——釣魚島列嶼の歴史主権及国際法淵源』北京：崑崙出版社。
- 吳天穎（2013）『甲午戦前釣魚列嶼帰属考（増訂版）』北京：中国民主法制出版社（青山治世訳・日本語版：華語教学出版社、2016年）。
- 国家図書館中国辺疆文献研究中心（2015）『文献為証——釣魚島図籍録』北京：国家図書館出版社。
- 成一農（2017）『『広輿図』史話』北京：国家図書館出版社。
- 成一農（2020）「明清海防総図研究」、『社会科学戦線』2020年第2期。
- 宋沢宇（2017）「『鄭開陽雜著』の文献価値研究」、『大学図書情報学刊』第35卷第4期、2017年7月。
- 孫靖国（2019）「鄭若曾系列地図中島嶼の表現方法」、『蘇州大学学報（哲学社会科学版）』2019年第4期。
- 孫欲容（2016）「徐葆光『琉球國貢全図』与清代琉球」、『中国文哲研究通訊』（中央研究院中国文哲研究所）第26卷第1期、2016年3月。
- 鄭海麟（2012）『釣魚島列嶼之歴史与法理研究（増

訂本)』北京：中華書局（増訂本の初版は2007年）。

鄭海麟（2013）『釣魚島新論』台北：海峽學術出版社。

内閣文庫（1971）『改訂内閣文庫漢籍分類目録』東京：内閣文庫。

原田禹雄訳注（2004）『明代琉球資料集成』宜野湾：榕樹書林。

原田禹雄（2006）『尖閣諸島——冊封琉球使録を読む』宜野湾：榕樹書林。

班偉（2012）「明清史籍における「釣魚嶼」の位置付けについて」，『山陽論叢』（山陽学園大学）第19卷。

班偉（2019）「尖閣諸島に関する中国史料の研究（三）——『籌海図編』『日本一鑑』の再検討を中心」，『山陽論叢』（山陽学園大学）第26卷。

潘肖薈（2017）「章潢『図書編』研究」山東大学儒学高等研究院硕士学位論文。

黎鴻藤（2014）『釣魚台是誰的？——釣魚台的歷史与法理』台北：五南図書出版。